

展示を考える1

What Is a Museum Exhibition?

来年度の実験展示の実施に向けて、今年度からその作業班が編成されました。本号とこれからの号で、そのスタッフのいく人かの方から、各々の展示への想いを述べて頂きます。

展示と体験

榎 美香 (千葉県立中央博物館歴史学研究所 上席研究員 / 共同研究員)

“Exhibition” and “Experience” at Museums

ENOKI Mika

博物館 (Museum) は今日、公的教育機関という性格を持っているが、その最初の出発点は16~18世紀ヨーロッパの上流階級による私設コレクションであった。王侯貴族や上流紳士達が航海時代を背景に収集した、異国の珍しい物品・動植物を陳列し、見せる (展示する) ためのスペースであったのだ。したがって、当初は来館者へのサービスよりもむしろオーナー側の意向や趣味を反映し、一種マニアックな性質のものであった。その動機のひとつは未知の異世界に対する好奇心である。外国の文化や文物、風俗習慣だけでなく、「都会」の人間にとっては、「辺境地」のそれもまた、やはり物珍しい興味の対象となり得たのである。日本においても、近世後期には都市部の好事家達は仲間内で見せあうことを目的に、競って名品、珍品を収集するようになった。その背景には紀行文や名所図会が広く流布し、一般の人々の間に他地域への関心が高まっていたということもあるだろう。

民俗学という学問もまた「自文化への回帰」という思考ルートを学問的根拠としつつも、やはり当初の動機付けとして中央から見た異文化への興味という一面があることは否めない。大正7年に渋沢敬三がはじめはごく個人的につくったアチックミュージアムなどもこうした流れの中に位置づけられよう。しかし、その後、系統的な博物館の基本的機能が整備されるようになると、各地域においても自文化の独自性を示すための博物館が作られるようになる。特に高度経済成長期の前後には地域に残された歴史史料や民俗資料の重要性が広く認識されるようになり、地域博物館・資料館の数は急増する。

また、近年は博物館の役割として、資料を扱うだけでなく、来館者への教育普及活動が重視されるようになってきている。これは博物館が公的な社会教育機関として位

千葉県立房総の むらの「体験」



上から
「上総の農家」の「サナブリ」
「上総の農家」の「虫送り」
「鍛冶屋」の「親子鍛冶屋教室(文鎮などを作る)」
「下総の農家」の「人形送り」



置づけられるようになった当然の結果でもあろう。かつての陳列・放任主義ではなく、博物館はそこに展示する「資料」の意味について、見る人たちに説明する義務を負うようになった。「資料」とは、ただそこにあるからといって資料になるものではなく、何らかの価値観が付加され、ひとつのストーリーの中に位置づけられるからこそ、資料となり得るからである。博物館はそれぞれの展示に責任を持って、一体そこで「何を伝えたいのか」という目的を設定し、来館者がそのことを少しでも理解しやすいように、さまざまな工夫を凝らすことが必要とされるようになってきたのである。

こうした中で、ここ数十年、盛んになってきているのが「体験」という手法である。展示を見るだけでなく、実際に来館者自らが行動をおこすことによって、その工程の中で資料への理解を深めてもらおうという方法である。人文系・自然系に限らず、いずれの分野でも最近の博物館では「体験」メニューが無いところは無いくらいである。但し、この場合も、主催者側は「体験」は目的ではなく手段にすぎないと自覚することが必要だと思われる。例えば、「わらぼうしを作る」という体験メニューがあったとする。藁から1足のぼうしを作り終えたならば、体験者は一つの達成感を得て満足するであろう。工作をやり終えたという手仕事の楽しさを味わうかもしれない。しかし、それは派生的に生じたものであって、そのものが目的ではないのである。テーマは何であっても良いが、博物館でわざわざこのような事業をやる場合は、何か伝えたいメッセージがあって、それを伝えるために「体験」してもらおう、というスタンスがなければ、単なる人寄せイベントになってしまう。

たとえば、私が以前勤務していた「体験博物館 千葉県立房総のむら」の場合、その目的は「伝統的なくらしや道具、もの作りの技を保存・継承し、新たな価値を見出し、展示や体験をとおして歴史や文化を学ぶこと」とされる。「ふるさとの技体験エリア」と呼ばれる部分については、いわゆる民家園型の博物館であるが実物資料の展示にこだわっておらず、建物や田畑、里山といった景観全体を「展示」としている。「房総」という特定地域の「江戸時代後期から明治初期」という時代を設定し、土農工商をエリアに分けて、そのモデルタイプとなるような擬似空間を再現する。建物は移築ではなく、新しく再現したものであり、そこに置かれた品々もほとんどは各地方の民俗資料をもとに地元の職人などに作ってもらった、いわば複製品である。だが、それ故に来館者はそ



農家の「稲刈り」



「川魚の店」の「うなぎの蒲焼」

れを「道具」として自由に使うことができるのである。実物資料がほとんど無いのに博物館といえるのか、単なるテーマパークではないのか、という議論もあるかもしれないが、冒頭に記したように、博物館の概念そのものが変化してきた中で、来館者に伝えるべきメッセージを維持し、そのための裏づけとなる現地データの蓄積がなされていることによって、テーマパークとは明確に区別される。「房総のむら」ではそのコンセプトの中で、年間300を超える体験や実演のメニューが毎日10数種類ずつ実施されており、実際に行なわれていた生活をいろいろな角度から擬似体験することができるようになっている。農家エリアでの農産物の生産や加工技術、食品加工、手工芸、年中行事の体験、町並みエリアでの職人技術の体験、武家屋敷における習い事などの体験、また時に応

じて農村歌舞伎舞台で民俗芸能の上演なども行なわれる。農家と職人の技術では、材料や道具を相互に提供するような有機的な関係ができており、また日々のこうした生産活動の実演・体験によって展示物である「景観」も維持されている。博物館で民俗文化を紹介しようとする目的は、人々が生きた文化や社会を理解してもらうことにあるが、そのためには、「房総のむら」の環境と手法は最適ともいえるだろう。資料を並べるタイプの博物館においては文字や映像で2次的に説明するしかないことを、実際に似た環境で「やってみる」ことができるのだから。こうした「体験」の有効性はすでに市民権を得て、全

国の博物館が独自に工夫を凝らして実施がなされているところである。しかし、前述したように、「体験」という手段が楽しく魅力的であるが故に、それ自体目的化してしまう危険性もまた大きい。本来は、メッセージを伝えるための手段であったはずが、別の目的（例えば家族のふれあいの場を提供するというような）のほうが優先されて全く無関係のお手軽な体験が増えてしまったりすれば本末転倒となり、その施設は自ら存在意義を見失ってしまう。「博物館」は、今後、当初のメッセージを見失わないよう、上手く「展示」と「体験」という手法を使いこなしていくことが要求されるであろう。

It is not enough to only watch exhibitions at museums.

We need to physically touch, use and take part in them.

The memories of new experiences are left in the participants' hearts.

観覧料という心的バリア

浜田 弘明（桜美林大学資格・教職教育センター 助教授 / COE教員）

How Is the Fee Decided?

HAMADA Hiroaki

今から10数年前、私が相模原市立博物館建設準備担当の学芸員をしていたころ、バリアフリーとかユニバーサルデザインという用語は、まだ社会的にそれほど定着したものではありませんでした。しかし、この10年ほどの間に、博物館界のみならず、社会的認知も急速に高まり、ハードの面では充実しつつあると言えます。

しかし、日本の地域博物館の現状を見ると、未だに有料入館ということが利用者にとって大きなバリアとなっているように思われる。バリアフリーという用語の用い方としては適切ではないかもしれないが、地域博物館の根幹を考える時、展示観覧が無料か有料かという問題は重要なものと考えます。

博物館法第19条に「公立博物館は、入館料その他博物館資料の利用に対する対価を徴収してはならない」という条文があるにもかかわらず、多くの公立博物館建設の際には、受益者負担という名のもとに、行政当局や議会の中でも、有料入館は当然のことのように論議が取り交わされている。実は、博物館法には抜け道が隠されていて、第19条は「但し、博物館の維持運営のためやむを得ない事情がある場合は、必要な対価を徴収することができる」と続いている。

私たちはかつて、このような議論に対応すべく、各地博物館の入館料徴収根拠の調査に当たって見たことがある。公立博物館の入館料は100～300円が相場であったが、その金額設定に積極的根拠は見出せず、利用者にあまり負担と思われない程度の金額とし、隣接館を参考にしたというものが多かった。有料の理由についても、これが「博物館の維持運営のためやむを得ない事情」と言えるのか甚だ疑問ではあるが、有料の方が展示を良く見てもらえ、施設を大事にもらえる、あるいは展示している側も緊張感が持てる、という極めて曖昧な回答が多く、何館かでは、今で言うホームレス対策のためというももあった。

今日、地域博物館の多くは、入館者の減少に悩まされている。2003年度の外部監査で、「民間なら倒産状況」と評された川崎市市民ミュージアムの例は、その象徴と言えよう。入館者減は有料館により多く、しかも長期にわたって展示更新をしていないというのが共通の課題となっている。川崎市のその後の「改善委員会」報告の中で、集客力向上のために入館を無料化にすべきとの意見が出されたのは、当然のことと言え、評価に値するものであった。